

Steel 鉄の点景 Landscape



火箸

— 明珍火箸にみる鉄の音 —

囲炉裏や火鉢を囲む生活が消えていったのはいつの頃からだったろうか。石油、ガス、電気が日本人の生活の中に定着する前、それらはごく当たり前の生活器具であった。囲炉裏で暖をとる、火鉢で餅を焼く、談笑する人々の声…。それらの風景の中で約束事のように添えられていた道具が火箸である。もともと実用品であった火箸が、最近では伝統工芸品として再び注目を浴びているという。ここでは兵庫県姫路の明珍火箸が醸し出す幻想的な音について触れてみたい。

明珍火箸の名の由来

兵庫県姫路市の工芸品である「明珍火箸」は、紐で吊してお互いを触れあわせると、澄んだ音と深い余韻を残すことで知られている。現在52代に至る明珍家はもともと甲冑師であり、姫路藩主・酒井家に仕えていた。第22代の先祖が平安時代の終わり頃、近衛天皇に鎧、轡を献上したところ、天皇から「触れあう音が明るく、たぐいまれなる珍器である」として「明珍」の名を授かったのが由来とされている。その後、安土桃山時代に千利休の注文で茶室用の火箸を作ったことから、茶道界における明珍火箸の地位は確立された。

明治維新と共に家禄を断たれた明珍家は、庶民の実用品である火箸の製造を始めた。しかし、庶民生活が洋風化されるにつれ囲炉裏や火鉢は次第に姿を消していき、火箸の需要も右肩下がりになっていった。そこから第52代に至るまで、試行錯誤の末に誕生したのが、火箸の触れあう音を利用した風鈴やドアチャイムだった。

たたら製鉄と玉鋼

音の極みを追求する第52代明珍宗理氏には火箸の素材に対するこだわりがあった。それは我が国古来の製鉄法である「たたら製鉄」法で出来上がる「玉鋼」を使用することである。たたら製鉄とは木炭を燃料として1500度以下の低温度でおこなう製鉄法である。



第52代家元 明珍宗理氏。
火箸風鈴の考案者。2003年
日本文化デザイン賞受賞。

この製鉄法は砂鉄からいきなり鋼をつくるケラ押し法と、ズク(銑鉄)作りを目的とするズク押し法に大別される。ケラとは鋼のもとになる塊であり、その内の約3割程度が玉鋼として日本刀をはじめ刃物、工具などに用いられる。ズクは炭素量が多く融けやすいので鋳物にも用いられるが、大部分は炭素を抜き下鉄と呼ばれる鋼や包丁鉄に用いられる。

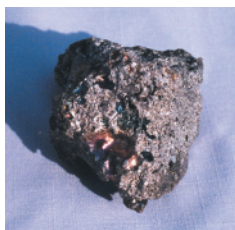
明珍氏はこのケラ(玉鋼)に目を付けた。10tの砂鉄と13tの木炭を原料に、大人12人が三昼夜かけてようやく3tの玉鋼ができる。不純物が少なく、錆びにくく鍛接しやすいのが玉鋼の特徴である。この玉鋼も表のように分類されるが、このうちの特級(炭素含有率1.0~1.5%で破面が特に均質なものを)を使用して制作された明珍火箸の音色は、かのスティービーワンダーが「近くで聞いていても遠くで聞こえる不思議な音」と絶賛したほどである。

■玉鋼の種類

玉鋼特級	炭素1.0~1.5%含有 破面が特に均質なもの
玉鋼1級	炭素1.0~1.5%含有 破面が均質なもの
玉鋼2級	炭素0.5~1.2%含有 破面が均質なもの
玉鋼3級	炭素0.2~1.0%含有 破面が粗野なもの
目白(めじろ)	玉鋼1級と同質で、大きさが2cm以下のもの
銅下(どうした)	玉鋼2級と同質で、大きさが2cm以下のもの
銑(ずく)	炭素1.7%以上含有で、溶解の進んだもの
歩(ぶげら)	鉄、鋼、銑、半還元鉄、鉄滓、木炭が混在したもの



焼き上がった玉鋼は白熱温度(1200度から1350度)から赤みの消える温度(約600度)以下の温度(400~500度)に下がるまでに、素早く金槌によって鍛えられていく。



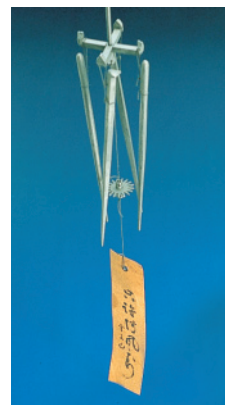
玉鋼(ケラ)。不純物が少なく錆びにくい性質を持つ玉鋼は日本刀の材料として日本古来の「たたら製鉄」法によって作られる。



素棒。この段階ではまだ明珍火箸独特の音色は出ない。

巧の技が音楽業界に広げた波紋

世界的なシンセサイザー奏者富田勲氏は、昭和30年頃に国鉄姫路駅のホームで明珍火箸と出会った。以来その音色を自分の作品の中で活かしたいという思いを暖めてきた。その思いは平成9年NHK放映の「街道をゆく」のテーマ音楽として実現した。また、ソニー(株)ではスタジオ用マイクのサウンドチェック用として明珍火箸を採用している。人声や打楽器、オルゴールに拍子木など様々な音源



明珍火箸

でテストを重ねた末に、何度揺すっても同じ音で鳴り、透明な上に余韻があるこの音が最終的に採用された。また、最近では映画「たそがれ清兵衛」でもその音色が効果的に使われている。

明珍火箸の音に関する学術的な調査については平成元年に大阪成蹊学園の研究者らにより論文が発表されている。それによると明珍火箸のうねるような独特の音は鍛造の過程で作り上げられる。素材棒と比較した場合、明珍火箸の各固有振動数が調和構造から見て数Hz~数kHz低い周波数側にずれているため、鐘の音のような金属の打撃音としてにぎやかな音に聞こえるのであろう、と記されている。また、火箸完成後の結晶粒度に関する所見では、火箸先端部では微細粒度が生成し、胴部においてはほぼ均一なパーライトとフェライト粒が生成しているのを確認しているが、音色との因果関係には言及していない。

甲冑から火箸へ、火箸から火箸風鈴への変換は「余技」から「本業」へ、そして実用品の「付加価値であった音」から「音そのもの」へと、時代の波に翻弄されながらの変換であった。神秘的な音、幻想的な音という言葉ではとても言い尽くせない音である。

もしも「いにしえ」という抽象的な言葉を「音」で表現するならば、明珍火箸の触れあいが醸し出す世界に繋がるような気もする。



1990年、明珍氏が考案・制作した楽器「明潤琴」。形状の違う12本の火箸から響きあう音色が、独創的な音響空間を作り出す。(姫路市書写の里・美術工芸館所蔵)

●取材協力 明珍宗理氏、姫路市産業局観光振興課、書写の里・美術工芸館、ソニー(株)